

Vol.4 ゼムパー、そのポテンシャルの迫体験

三谷 克人 (建築家、ウィーン在住)



三谷 克人 (みたに・かつひと)

1950年大阪府生まれ。1975年京都大学建築学科卒業。1979年渡欧。ウィーン工大在籍のかたわら設計事務所勤務。1992年コンペ等入選を機に独立。以降「TRANSPOLIS」を主宰、現地の建築家の職能を遂行中。日本での客員講演多数。オーストリア建築家中央連合会会員。

いざ、博物館へ

ここまで、19世紀のことを三回お話したが、ストレスだったかもしれない。でもそれは、今回の内容を面白いと思っていただくための、知識的な「筋トレ」だった。準備も整ったことだし、練習試合にでかけよう。その会場は博物館。ゼムパーと同じものに接すれば、理解が早いだろうから。ルーブルには「モナリザ」のみならず、世界史の「ハムラビ法典」の石碑や「ロゼッタ石」、そして数千年にわたる古代オリエント文明の、考古学的発掘物が並んでいる。絵画とはちがって、ここでは行列しなくても良い。

展示物に論旨をフォローする

古代オリエントの帝国アッシリアの展示スペースに入ると、数千年の時差を感じさせない装身具や、建築の部位などが展示されているが、視線はすぐに、モニュメンタルな石のレリーフに、引きつけられる。

そこには宗教的儀式や行列、そして戦闘的シーンなどが描写されているが、ゼムパーが解説に加えた、図版の実物を発見できる。たとえば、神官が手にする容器。編まれたカゴの外観を呈するが、持ち手のディテールからすると、金属製のはずだ。どうということだろう？ゼムパーによると、この容器は編みもの細工の段階で、すでに造形がスタイルとして確立していた。カゴ職人が線材の特性を活かして、双曲線的に編んだその中細りな形状が、強度を高める効果をもつことも、寄与しただろう。後世その素材が、豪華を求めて金のブリキに置き換わっても、もとの造形がスタイルとして踏襲された、ということだ。『材料変換の原理』の典型的な事例だといえる。

古代戦車、その機能と構造

つぎに注意を喚起するのは、戦闘用の車両だ。というのも、機能と造形という観点から、ゼムパーは図版を取り混ぜ、詳細に分析

を加えているからだ。当時の合戦の勝敗は、戦法的にチャリオット(以後戦車と呼ぶ)を如何に投入するか、に懸かっていた。

左の図版は、紀元前2500年頃に栄えた、シュメール人の戦車である。車輪は板状で、スポークではない。上部構造は木質、断面を大きくして強度を確保したために、敏捷ではなかったが、戦略的価値はあった。そして、アッシリアがメソポタミアを支配し、それとエジプトが覇を争う時代となる。

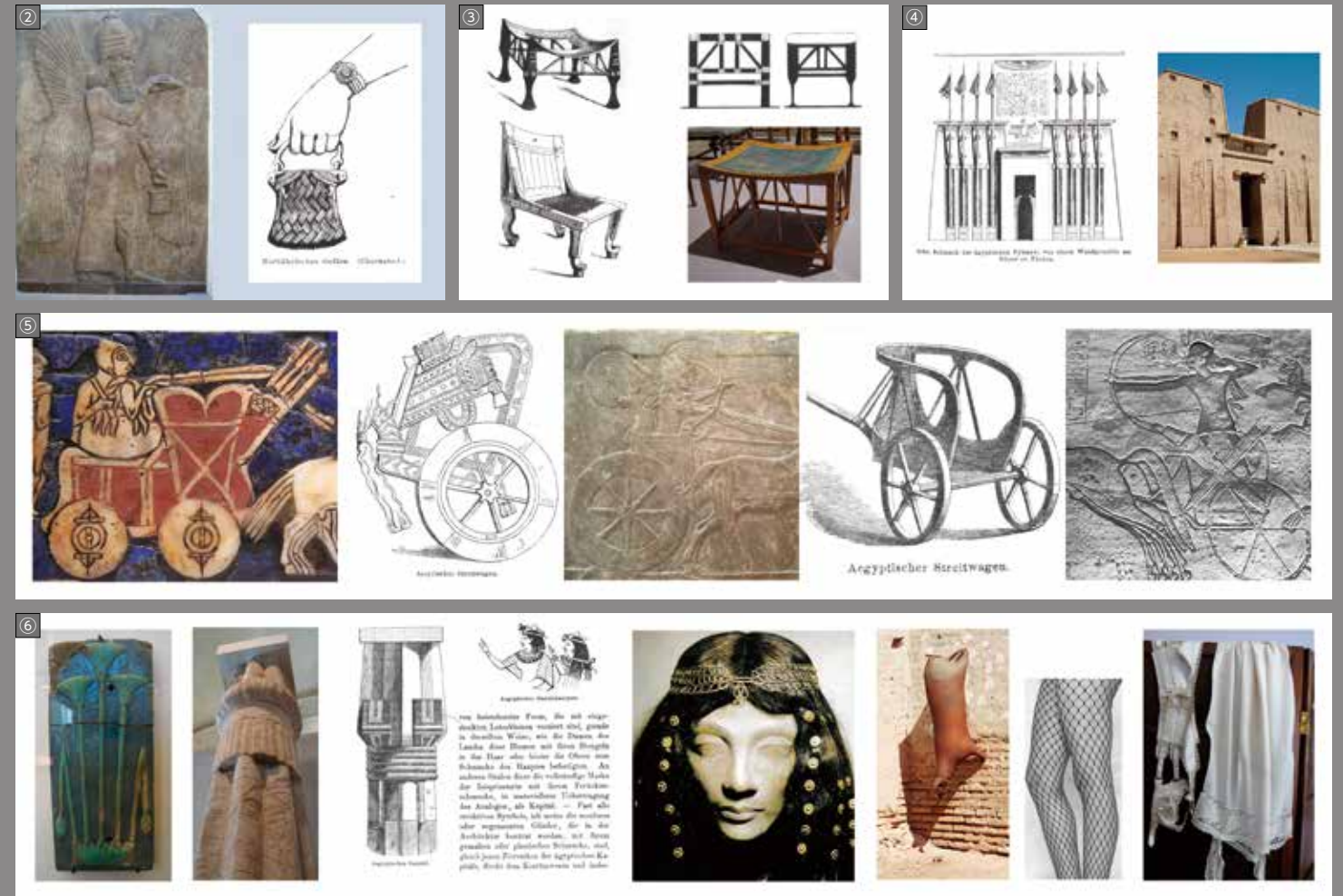
中央が、アッシリアの戦車だ。ゼムパーはいう。< 外観からすると、木のフレーム保護のために、ブリキが打ちつけてあるようにみえるが、金属の管構造で作られている。直線の多用(折り曲げ加工の前提)が、そのことを示唆する。金属の特性を活かすスタイルへの希求は、みられない。>

一番右が、エジプトのそれだ。< 繊細で優雅、あえて木を用いてその特性を活かした形状を与え、細い鉄材を効率よく補強に配して、軽くてして強靱。堅固さより、機動力で敵を蹂躪することを旨とした作りは、エジプトの職人の、技術の高さを示している。>ゼムパーは、アッシリアの戦車にも管構造の長所を認めるが、「荷車」にも比すべきものと批判する。アドルフ・ロースを筆頭とする、ウィーンのエジプト最良は、このあたりに端を発している。

建築とテキスタイル

さて、ゼムパーの論にはもう一つ、建築が学問的にとり扱わないが、興味深いテーマが存在する。それは、「服飾と建築的発想との相関関係」についての考察だ。インタージャンルのフォローが、難しいだろう。

それを支えるのは、彼特有の美の世界観。極端に短略すれば、「静的なものとの動的なものとの、調和あるいはその拮抗に、美の力学的モーメントを認識しようとする」姿勢、彼のいう内的要因である。たとえばエジプトには、旗竿と吹流しを、ファサードの主役とした神殿がある。そこでは、灼熱に座する静



①ルーブル博物館、古代オリエント展示場入口(筆者撮影)
 ②アッシリアの神官ルーブル、カゴの外見をもつ容器(筆者撮影、筆者アーカイブ)
 ③古代エジプトの腰掛け、建築家フランクが独自の家具にリバイバル(筆者アーカイブ、筆者撮影)
 ④古代エジプト・テーベにある神殿、8本のマストの吹流しがファサードの主要エレメント(筆者アーカイブ)
 ⑤古代戦車の変遷、左から：
 A. シュメール人の戦車BC2500年頃(ウィキ・コモン)
 B. アッシリアの戦車の図版、管構造BC900年頃(筆者アーカイブ)
 C. アッシリアの戦車、石のレリーフ、ルーブル(筆者撮影)
 D. 古代エジプト、戦車の図版、BC1300年頃(筆者アーカイブ)
 E. 古代エジプト、戦車の壁画(ウィキ・コモン)
 ⑥建築とファッション、左から：
 A. 古代エジプト、パピルスを描いた壁飾り、ルーブル(筆者撮影)
 B. 古代エジプト、パピルスをモチーフとするコラム、ルーブル(筆者撮影)
 C. 古代エジプト、髪飾りと柱頭の関連を示唆する図版(筆者アーカイブ)
 D. 古代エジプト、金の小コインを記した整髪用ネット着用モデル(筆者アーカイブ)
 E. 家畜のレザー製水袋、キルギスタン、20世紀初頭(ウィキ・コモン) F. 女性の網タイツ(筆者アーカイブ)
 G. 再現クリムト・アトリエハウス、モデルの待合室(筆者撮影)

【書籍紹介】
 「ゴットフリート・ゼムパーの建築論的研究」
 大倉三郎著、中央公論美術出版社

的な神殿の躯体と、風にゆらめき内部の涼しさを暗示する、テキスタイルの対比が、相互を引き立てることとなる。

もうひとつは直接的要因で、ゼムパーは、パピルスにちなんだコラムを取り挙げる。< このコラムの柱頭は、パピルスの花を髪飾りとして、ヘアバンドに挿すことを好んだエジプト女性の風習を、造形に写し込んだものだ。おかつぱのヘアウィッグを着けた、女性の神官を冠するコラムも含めて、柱「頭」という部位の、意を得た造形だといえる。>

ヘアスタイル、様式そしてファッション

ヘアスタイルに関連してゼムパーは、別の意味深い発言をしている。ケラミックの様式を検討する過程で、先史時代の壺の多くが、ぐるりと巡らされた線によって分節されていることを指摘し、それを、ネット(網)というものの役割との関連から説き、次のようにいう。< なにかしら不定形なものに秩序を与えて、美のコンセプトに沿わせたいという望みは、人の深部に根付いている。・・・たとえば、往々にして独自に振舞おうとする、若

い女性の豊かな頭髮。それを繊細なネットで好ましく制御すると、魅力が一段と高まることを、我々は知る。>

乾燥した砂漠地帯では、剥ぎ取った家畜の皮を縫い合わせて袋にし、水を運搬するのが一般だった。筋力の限界に至る重労働だから、思わぬ衝撃を受けて大丈夫な方法が、選ばれたのだろう。そして、そのプロポヨと重心がゆれ動く欠点は、ネットで固定することによって解決される。つまり、壺に描かれたネット状の模様は、内包された液体の不定形性、そして、その制御のシンボルとしてあるのだ。知られていないが、『様式論』はこういった指摘に満ちている。

ここにおいて私たちは、思いもかけず、ファッションの真っ只中に闯入ってしまう。ファッションが、人の身体性にミリ単位で肉迫し、そのポテンシャルを探るものである以上、このゼムパーのいう、内包されるものの緊張と、その意図的な開放のデュアリズムが、最大のテーマということになる。彼の考察を応用してみよう。課題として、網タイツと初期の下着の工夫を示しておく。象徴的な「結び」、透明度のグラデュエーション、そして、違犯

と意識的な否定。しかし、そういう表層の分析に耽けることは慎みたい。それは、外部から観察するしかない文化人たちに、任せておけば良い。我々は消費者ではなく、デザインする側なのだから。内部にあって、そのメカニズムを実際に機能させるべく、ディテールと対峙するのが本業のはずだ。

ゼムパーとともに「ふりだし」へ

ゼムパーがデザインの示唆に富むことを、わずかながらご紹介したが、興味をお持ちいただけただろうか。博物館の陳列物が有用なこと、それはルーブルに限った話ではない。日本の博物館の鑑や民芸品にだって、見方さえ知っていれば多くが学べるのだ。キャプションに日本語の資料を示すので、紐解かれることをお勧めする。

幸か不幸か、そういう予備知識をもって建築史を振り返ると、モダンの別の側面が、ウィーンの延長線上に見えてくる。次回からは、ウィーンの世紀末を担った建築家たちを、ゼムパーの視点から分析してみよう。(続く)